

新石器化と都市化のはざま

—イラク・クルディスタン、シャカル・テペ遺跡の第3次発掘調査(2024年)—

小高 敬寛 金沢大学国際基幹教育院准教授
前田 修 筑波大学人文社会系准教授
三木 健裕 慶應義塾大学文学部助教
早川 裕弐 北海道大学地球環境科学研究院准教授
ヘムン・ヌリ・ファッタ スレーマニ文化財局局員
フセイン・ハマ・ガリーブ スレーマニ文化財局局長

Between Neolithization and Urbanization: Excavations at Shakar Tepe, Iraqi Kurdistan, the Third Season (2024)

ODAKA, Takahiro Associate Professor, Institute of Liberal Arts and Science, Kanazawa University
MAEDA, Osamu Associate Professor, Institute of Humanities and Social Sciences, University of Tsukuba
MIKI, Takehiro Assistant Professor, Faculty of Letters, Keio University
HAYAKAWA, Yuichi S. Associate Professor, Faculty of Environmental Earth Science, Hokkaido University
FATTAH, Hayman Nuri Staff, Slemani Antiquities and Heritage Directorate
HAMA GHARIB, Hussein Director, Slemani Antiquities and Heritage Directorate

小高
敬寛
前田
修
ほか

1. はじめに

後期新石器時代(前 7000/6600~5400/5200 年頃)、「肥沃な三日月地帯」で新石器化を遂げていた人びとは、それまで荒野に過ぎなかったメソポタミア低地の開発に乗り出し、続く銅石器時代(前 5400/5200~3100/3000 年頃)には、やがて文明社会が花開く都市化の舞台が整えられていった。私たちはそのプロセスを定点的かつ実証的に追跡することを目的として、イラク・クルディスタン地域スレイマニヤ県南東部にて、シャカル・テペ(Shakar Tepe)とシャイフ・マリフ(Shaikh Marif)という二つの先史遺跡を調査してきた(Odaka et al. 2020, 2023a, 2023b, 2025; 小高ほか 2024)。これらの遺跡が立地するシャフリゾール平原は、「肥沃な三日月地帯」の東翼、ザグロス山麓の一角に位置しながら、ティグリス河の支流ディヤラ川を介して、メソポタミア低地へと通じているため、新石器から都市化への移行過程を探るうえで恰好のフィールドといえるだろう。

2. 2024 年の発掘調査

2024 年 8 月 24 日から 9 月 19 日にかけて、シャカル・テペ遺跡の第 3 次発掘調査を実施した。この遺跡は、古くから知られる小高い遺丘(I号丘)の他、少なくとも三つの低い遺丘(II~IV号丘)からなる(図 1)。

これまで 2019 年と 2023 年に I 号丘北西部(A 区・C 区)を、2023 年に II 号丘頂部(B 区)を発掘してきたが、今回は 2019 年に発掘した A 区を幅 1 m の土手を挟んで南西側に拡張する形で、7×7 m の調査区を設けて発掘を行なった(図 2)。調査区は I 号丘北西部の急斜面から緩斜面にかけてであり、この付近の遺丘は 2023 年 8~9 月の調査時に比べて大きく後退していた(図 3)。この 1 年、遺跡が面するダム湖の水位が著しく高かったため、侵食が進んでしまったようだ。

調査区の南側地表は標高が高く、最高点で約 485.5 m を測るが、厚い表土層が堆積していた。文化層は約 483.6 m から下方に堆積しており、約 480.9 m まで掘り下げたものの、地山には到達しなかった。発掘された文化層は、出土土器の型式学的所見から後期新石器時代の堆積と考えられる。

3. 検出遺構

ただし、発掘区の北東部 4 分の 1 は、階段の付属する幅広く深い溝によって攪乱されていた。その覆土には、多くの後期新石器時代の遺物だけでなく、ウバイド期の土器片やより後代の遺物も含まれていた。地域住民への聞き取り調査によれば、この溝は 1980 年代、イラン・イラク戦争の際に戦車壕として掘削されたという。この壕の東端は、2024 年の発掘区の範囲内では確認できなかったが、おそらく 2019 年の調査時に

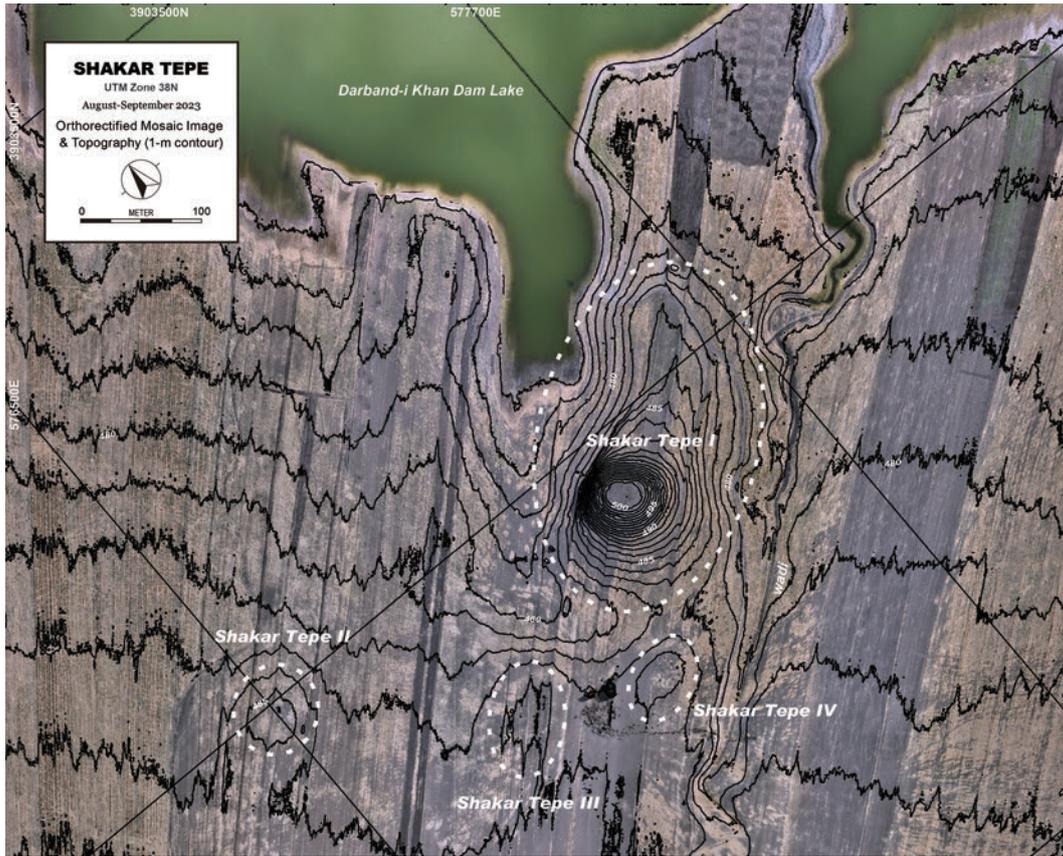


図1 シャカル・テペ遺跡および周辺のオルソ補正画像と地形



図2 シャカル・テペ遺跡および周辺の位置

練土壁として報告した002号遺構(Odaka et al. 2020, 2023b)の西側がそれに当たると推定される。002号遺構と戦車壕の方向が一致していること、002号遺構の西側では、当時発掘した最深部からでさえ、少ないながらも後期新石器時代よりも後の時代の資料が出土していたことが、その理由である。そこで、002号の遺構番号は、誤認していた練土壁の代わりに戦車壕に振り直すことにした(図4)。この新しい002号遺構は幅約3m、深さ2m以上を測り、発掘では底部まで到達

することができなかった。

後期新石器時代の文化層でみつかった遺構のなかでは、竈(いわゆる *tannor*)が最も顕著であった。大型の土器とともに発見された3基の土製竈(003~005号遺構)は、その代表例である(図5)。これらの竈は直径約50~75cmの円形・丸底の底部をもち、開口部のあるドーム型の上部構造が遺存している場合もあった。3基のうち2基は、同じ場所で、ないし一部重複しつつ、繰り返し構築されていた。004号遺構の底部

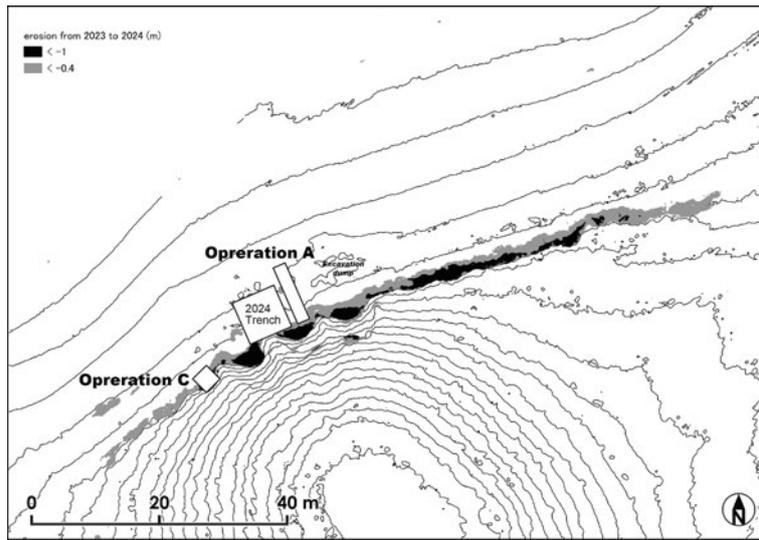


図3 シャカル・テペ遺跡Ⅰ号丘北西部の侵食(2023～24年)

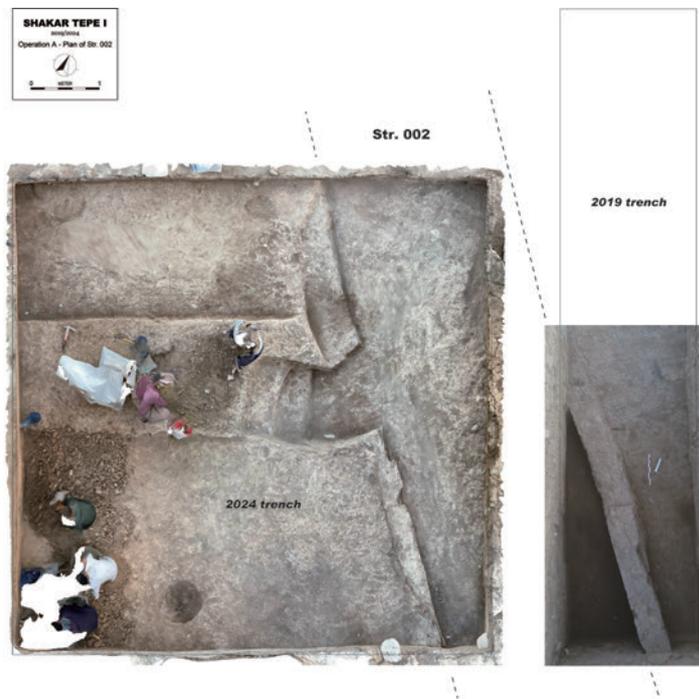


図4 002号遺構



図5 003～005号遺構



図6 007号遺構(左)・009号遺構(右)



図7 出土土器(左：ハッサーナ標準土器、右上：粗製植物混和土器、右下：精製植物混和土器)

の下にはもう2枚のより古い底部が残っており、005号遺構は明らかに造り変えられたことがわかる2基の竈から構成されていた。他にみつかったものを合わせると、合計で7基の竈を検出した。これらの竈の周囲に建物の壁は確認できず、一方で炉と思われる炭や灰の詰まった浅い土坑がいくつか見つかった。

興味深いことに、竈や炉とともに3基の甕棺墓が発見された(図6)。甕棺は貼付文で装飾された大型で厚手の粗製植物混和土器であり、底部の上に乳児骨が屈葬されていた。甕の上部は割れていて口縁部が見当たらず、意図的に破砕したうえで遺体を破片で覆ったようにも思える。それが正しければ、甕棺葬ではなく甕被り葬と表現すべきかもしれない。なお、甕棺を埋めた土坑の掘り込みは確認できなかった。

4. 出土遺物

後期新石器時代の文化層から出土した遺物の様相は、2019年の調査において新石器時代上層(前6240~6000年頃)から出土したものと一致していた。

土器は、ハッサーナ標準土器、粗製植物混和土器、精製植物混和土器の3つのウェアグループからなる

(図7)。北メソポタミアでみられるような、ハッサーナ標準土器を主体とするアセンブリッジの典型例とは一線を画し、小ザブ川より南東側に特有な、地域的なヴァリエーションとして捉えられるが、そのなかで最も極端な例に位置づけられる。

打製石器は、616点がチャート製、25点が黒曜石製であった(図8)。黒曜石はマンチェスター大学での蛍光X線分析による産地同定の結果、遺跡から約500 km離れたトルコ南東部のピンギョルないしネムルト・ダーで産出したものと判明している。石器インダストリーは、新石器時代のザグロス山麓で広く知られているムレファティアン伝統とは異なり、押圧剥離による細石刃製作は皆無で、定型的な石器も極めて少ない。

他に、磨石や石皿といった磨製石器、石製ビーズなどの装身具、ヘラなどの骨器、土製紡錘車などが出土した。また、002号遺構の覆土からはウバイド土器の出土が目立った。この遺構は主に遺丘の崩落土で埋まったものと考えられるため、同時代の堆積が調査区上方に存在することを示唆する。



図8 出土石器(上：チャート製、下：黒曜石製)

5. おわりに

2024年の調査は、前7千年紀後半の村落生活の一面を明らかにした。発掘されたハッスーナ期の集落の一角は、複数の竈や炉が集中していたものの、建物の壁はなく、おそらく調理場として使用された屋外空間であったと考えられる。竈や炉は繰り返し造られており、人びとは集落の各空間を目的に応じて使い分ける意識を持っていたのであろう。甕棺墓は、乳児のみを生活の場に埋葬するという葬送習慣を示唆している。

このような営みは、おそらく数世代にわたって維持されてきたと推測される。

シャフリゾール平野における私たちの調査研究は道半ばであり、今後も後期新石器時代から銅石器時代にかけての文化変化を追跡していく所存である。そして、新石器化から都市化への移行過程において、この地域が果たした歴史的役割の解明に迫っていきたい。

なお本調査は、日本学術振興会科学研究費(課題番号：JP23H00692、JP21H00590、JP21KK0008)等により実施した。

参考文献

- ・ Odaka, T., O. Maeda, T. Miki, Y. S. Hayakawa, P. Yewer and H. Hama Gharib 2023a Excavations at Shaikh Marif, Iraqi Kurdistan: Preliminary Report of the First Season (2022). *Ancient Civilizations and Cultural Resources* 1: 1-22.
- ・ Odaka, T., O. Maeda, K. Shimogama, Y. S. Hayakawa, Y. Nishiaiki, N. A. Mohammed and K. Rasheed 2020 Late Neolithic in the Shahrizor Plain, Iraqi Kurdistan: New Excavations at Shakar Tepe, 2019. *Neo-Lithics* 2020: 53-57.
- ・ Odaka, T., O. Maeda, K. Shimogama, Y. S. Hayakawa, Y. Nishiaiki, N. A. Mohammed and K. Rasheed 2023b Late Prehistoric Investigations at Shakar Tepe, the Shahrizor Plain, Iraqi Kurdistan: Preliminary Results of the First Season (2019). In N. Marchetti et al. eds., *Proceedings of the 12th International Congress on the Archaeology of the Ancient Near East, vol. 2: Field Reports, Islamic Archaeology*, 415-428. Harrassowitz Verlag, Wiesbaden.
- ・ Odaka, T., O. Maeda, T. Miki, Y. S. Hayakawa, Y. Itahashi, M. Oda, R. K. Salih and H. Hama Gharib 2025. Halaf and Late Chalcolithic Occupations at Shakar Tepe in the Shahrizor Plain, Iraqi Kurdistan: Preliminary Report of the 2023 Excavations. *Archaeological Research in Asia* 41: 100592.
- ・ 小高敬寛・前田 修・三木健裕・早川裕式・板橋 悠・R. K. サリフ・H. ハマ ガリーブ 2024 「新石器化と都市化のはざまーイラク・クルディスタン、シャカル・テペ遺跡の第2次発掘調査(2023年)ー」『第31回西アジア発掘調査報告会報告集』40-45頁 日本西アジア考古学会。